



# ばく通信 No.11

2019年6月発行 特定非営利活動法人 発達障害児応援団 NPOばく

NPOばくの第11期総会を5月18日に開催しました。2019年5月時点で通算154人の学習支援を行いました。保護者を通じて、医師や教員、相談員の皆様の好意的な評価が伝わってきて、励まされる思いがしています。しかし、放課後デイサービス等、支援の場が広がるなかで、“NPOばく”へのニーズも変化していることも感じています（学習支援申込みの微減と一般相談、知能検査実施依頼の増加）。増えてきた支援の場の質の向上を目指して、私達が積み重ねてきた実績やスタッフの専門性をもっと発信していくことが重要だと思いました。2018年度に立ち上げた3つの事業の成果と今後の事業方針を報告します。子どもと保護者の幸せにつながる企画を充実させるためにも、賛助会員のご継続、ご入会、ご意見をお願いします。

## <事業報告と今後の予定>

### ①終了生フォローアップ事業 “ほっとルーム”（登録制）

中学生や高校生の保護者の座談会は小学生の保護者にも有効な情報満載でした。そこで2019年度は小学生の保護者も交えた座談会を行う予定です。また、保護者からの“ちょこっと相談”も随時受けております。座談会は8月 12月 3月を予定しています。

### ②不登校支援事業（登録制）

実際に学習支援を行ったのは1件です。在籍校に毎月指導報告書を送付したり、主治医やソーシャルワーカーに連絡したりして、学校復帰につながりました。他ケースでは訪問支援や他機関の紹介を行いました。2019年度は保護者の座談会を偶数月第3火曜日に開催予定です。

### ③支援者連携事業 “おべんきょう Café”（賛助会員対象 申込み制）

2018年度は公認心理師試験対策学習会と事例検討会を行いました。好評でしたので、2019年度は事例検討会と“知能検査を支援に生かす”等のテーマで勉強会を企画します。

6月25日、7月23日、9月24日、11月26日、1月28日；午後6時半～8時

7月14日 午後1時～4時 公認心理師試験対策勉強会

## ※今年度在籍（2019年6月現在）

- ・入室児 33名（不定期指導1名を含む）
- ・スタッフ 指導担当14名、相談担当6名（指導兼任2名） 計18名

【公認心理師6名 臨床発達心理士8名 特別支援教育士7名 臨床心理士2名 言語聴覚士 社会福祉士】

## <活動報告> 客観的に捉える力（メタ認知）の育ちを支える

保護者のお話を伺うと、発達凸凹のある子どもの幼児期のエピソードとして、ことばの遅れ、引っ込み思案、一人遊び、乱暴等がよく挙げられます。その子の「～したい」と願う自発的な気持ちが上手に表現できないまま（子どもの意図や意思が眠ったまま）、保護者の心配も重なり、熱心な（子どもにとっては受身的な）早期教育やトレーニングが行われたのではと推測されることがあります。子どもの育ちには、とりわけ、発達凸凹があるからこそ、他者とのやりとりの楽しさを経験し、そこから生まれる伝えたい気持ちを受け止めて共感してもらうことが必要と感じています。その経験の積み重ねが、客観的に自分を捉え、他者の気持ちを汲み取る力やスキルを身につけたいと願う気持ちにつながっていくと思います。ばくでは、対話的関わり（子どもの話を聞き、受け止め、整理して、認めること）を大切にしています。

子どもの育つ道筋で起きるさまざまな出来事を、保護者と共に考え、保護者の不安に伴走し、ばくを巣立った後も見守りつづけたいと願っています。保護者や本人と困難な時期を乗り越えたことを語りあう時、支援者としての幸せを感じます。

### A児(支援機関 小2~小3) 劇遊びの中で育つ力

主訴は「友達に一方的に関わる。友達がいやと言ってもやめない」。学習面での遅れは見られない。構造化された環境では、挨拶等は上手にできる。しかし、実際場面では、怒ったり泣いたりして、友達関係をうまく築くことができない。生育歴上のエピソードから、保護者の不安と医療機関受診等のなかで、早期から受け身的な指導が行われたことが伺えた。そこで、まず、A児には、劇遊びを通じて、楽しくやりとりするために必要なスキルを身につけたいと願う気持ちを育てること、さらに客観的に物事を捉える力(メタ認知)をつけることを目指した。

劇遊びの中では、セルフコントロールやセルフモニタリングの力を高めるために、A児の気づきを意味づけてフィードバックしたり、よりよい行動を考えるもう一人のA児「スーパーA」を設定したり、コミック会話を用いて振り返りをしたりした。グループ活動(ゲーム)の前には、目当てやリマインダーとしての合図を決めて、コントロールできた経験を積ませた。

2年時後期 ゲームの最中、負けそうになって泣きそうな友達に、A児は追い打ちをかけるような言葉を言った。すると、友達が泣いてしまった。担当がA児に友達が泣いた理由を伝えると、はっと表情を変えて「わからなかった。」「ごめんね」と自発的に友達に謝った。

A児は、大人の見守りの中で、コントロールしたい気持ちが芽生え、方法を知り、それを実際に行う事が少しずつできるようになってきた。そして、支援を続ける毎に友達を求める気持ちやコントロールしたい気持ちが大きくなっていった。今後は「分かっているけど実際場面で失敗してしまう」ことを、A児が理解し、様々な場面で「がまんして~できたよ」、「(同じ状況でも)うまくやれることが多くなったよ」とA児自身が思えるよう、人に相談し、助けてもらったら感謝を伝えて生活できるよう支援をさらに続けたい。

### B児(支援期間 小3~中3) 数学の学習と指導者との対話の中で育つ力

主訴は「学習面で気になる(特に、算数)」。知的発達に遅れがなく、おしゃべりだけど、礼儀正しく、見た目もかわいらしい男の子。文字の字形は整っている。友だちとのいざこざがあったり、算数ができなかつたりする程度では、発達障害(LD)があることには気づいてもらいにくいケース。指導は、当初、算数や語彙を広げることを中心に行われた。保護者の話では、基礎的な読み書き計算の力や自分で勉強する習慣等が身についたとのこと。

高学年になって、被害的言動や学習への取り組みの難しさが顕著になった。本児の特性(衝動性の強さや自分の視点だけで考える)が被害的な認知を強めたように思う。指導の枠組みを明確にしたり、本児の言い分を視覚的に整理したりすることを増やすことで、状況を客観的にみることができてきた。しかし、学習面でも、生活面でも、論理の飛躍があることや言葉の意味の取り違えがあること、一方で、本児自身の愛嬌のよさ等から特性を理解されにくいことから生じるトラブルも推測された。そこで、論理的に考え、表現する力を育てることを目標に中学生でも支援を継続することにした。

数学を中心にした学習支援は順序立てて考えたり、理由を考えたりするトレーニングになったようだ。トラブルが起きた時や進路選択の時期には、指導者に何度も何度も繰り返し同じことを話し続けて(指導者は聞き続けながらも、客観的な情報を伝えた)、自分なりに折り合いをつけ(客観的に判断できたようだ)、自分の選択に満足して高校に進学した。

B児の育つ道筋に伴走し、よりよい選択ができるようにするためには、相談担当の役割は、保護者の安定と安心につながる情報整理や情報提供を行うと共に、子どもの変化を発達の視点でみていくこと、特に、論理的な考え方や表現力について観察することが大切だと思った。

#### 特定非営利活動法人 発達障害児応援団 NPOばく

〒422-8077 静岡県駿河区大和2丁目6番5号 東京堂ビル305号

TEL・FAX: 054-266-5616 (火~金曜日 15時~19時30分)

E-mail: baku@orion.ocn.ne.jp

URL: <http://www.npobaku.sakura.ne.jp>

★賛助会費振込先: 郵便口座番号 00810-6-134767 発達障害児応援団NPOばく

(一口1000円、何口でも)

